



海外 博物館 事情

オーストラリア

多文化展示への模索

Foreign Museums

サイモン・ジョン

(神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 博士前期課程)

オーストラリアの博物館は主に公立である。また、連邦国のため、各州に大きな博物館があり、中央には博物館地区もある。全国に存在する約1,300の博物館(美術館も含む)を考えると、これは1館当たり約1,500人に概当する。しかし、首都・州都に集中しており、博物館が近くにない土地の方が多い。首都キャンベラには「文化地区」が造られており、面白い空間となっているが、人口はたった30万人であり、観光客も少ないため、立派な博物館は十分利用されているとは言えない。

キャンベラは、シドニーとメルボルンの間に、1927年に創立された若い都市である。しかし戦争の出費により、都市造りは遅れてしまった。設計士バーリー・グリフィンの計画に基づき造り続けられたが、彼の名前が付けられた中心的な湖は1963年まで完成されず、それを囲む予定の文化地区はようやく90年代に入ってから形が見えてきた。国立美術館、旧国会議事堂内の国立肖像美術館、国立資料館、国立博物館、戦争記念館、国立恐竜博物館、国立科学技術センター、キャンベラ・ミュージアム&ギャラリー等が文化地区に含まれる。

2001年(連邦100周年記念)に開館したオーストラリア国立博物館は、建築の面白さにおいても国民の物語が主役である意味においても、新型の博物館である。テーマは土地、国家、国民の3つであり、難事の先住民と白人渡来の両面を扱っている。最先端の技術を使用した展示もモダンな建築も魅力的であるが、残念なことに来館者はまだ少ない。さらに首都は政府、外交、大学、文化という4点だけに集中しているため、人口は今後も増えそうもない。「集合地」を意味する「キャンベラ」にある博物館へ、来館者が増えるようにさらに努力する必要がある。

しかし、オーストラリア戦争記念館には来館者が比較的多い。湖を通し、国会議事堂から直線で見える広い高地に位置し、議事堂と共にかなり目立つ。因みに日本人の知人によると、現地のツアーガイドが「戦勝記念館」と呼んでいたが、その訳は誤りである。戦勝を祝うものとは完全に異なり、戦士の犠牲と戦争の残酷さを忘れない



オーストラリア戦争記念館

ようにするためである。1915年に初めて戦士を記念する発想は、ガリポリで完敗した勇武から生まれた。敗北したベトナム戦争の扱いも大変な問題であったが、犠牲と同時に戦争の愚かさを説明するようになった。表参道、記念堂、博物館、彫刻庭園の4つの区域が丁寧に計画され、静かな場所になっている。そしてちょうど1941年に完成した記念堂では、日豪友好や世界平和のための多様な企画が行われている。

首都と比べると州都の博物館には来館者数は多い。筆者の地元であるビクトリア州は、「文化の都」を誇り、他州より博物館が多い。ミュージアム・ビクトリアの3つのキャンパスはサイエンスワークスという体験型科学博物館、移民博物館と中核をなすメルボルン博物館である。1854年に州の創立とともにビクトリア州国立博物館が開館した。都心の真中であつたが、2000年に現在のサイトに移動し、かなり広く、モダンな展示空間ができあがった。小学生の頃訪れた当時の博物館も面白かったが、余りに堅すぎ、地味とも言えた。しかし現在の博物館は最先端技術を駆使し、以前は見られなかった多次元の展示が行われている。「民衆のための博物館」というコンセプトから生まれ、面白くさせることを目標とし、多様な企画により幅広い年代の来館者が楽しめる工夫がある。

都心から徒歩10分のカールトン庭園にあるため、メルボルンの象徴である緑の庭園に囲まれ、隣には王立展示

館もミュージアムの一部として常設されている。1880年に建設され、同年、メルボルン博覧会の展示会場となり、1901年には最初の国議会がここで行われた。2004年に建築物としてはオーストラリアで初の世界遺産に指定された。この建物が当然博物館の一番大規模な展示物であるが、本館には8つのギャラリーがある。

まず、児童ギャラリーは五感を全て利用し、楽しみながら学べる体験空間である。教育は、やはりこの博物館の最も重要な目的である。通学年齢層向けの展示になると、その展示教育内容は自然科学が中心となりこれに関するギャラリーが4つある。心神ギャラリーは現在工事中であるが、科学・生命ギャラリーでは、国の象徴である有名で珍しい動物、「バーチャル・ルーム」の火星、カンボジアのアンコール等の再現、40平米の世界で4番目で唯一残っている初代コンピューター等が丁寧に展示されている。進化ギャラリーの「恐竜」「大規模有袋動物」「ダーウィンからDNAへ」の展示も人気がある。森林ギャラリーは世界初の博物館内森林と言われ、生きている展示として120種類以上で8千本近くの植物がいきづいている。

他の3つのギャラリーは人間文化を扱っている。教育の他に記録・記念がこの重要な目的である。太平洋ギャラリーではオセアニアという多彩な地域を代表するものとして、南太平洋の島々から移民した人のコミュニティの船などの民具を展示している。ここで目立つところは展示物よりもその間の広い空間であり、これは意図的に太平洋の広さを表している。第一印象としては比較的小さなコミュニティのためには大きすぎると思ったが、その空間にいればいるほど穏やかな気持ちになり、日本の博物館では考えられない程の贅沢な広さに感動した。

現在先住民の扱いは博物館だけではなく、社会全体として一番重要である。先住民ギャラリーは「ブンジラカ」と呼ばれるが、2つの民族の言葉から合体語「創造の場」



メルボルン博物館 カールトン庭園の中の王立展示館(左)と本館

を意味している。現地の先住民コミュニティが自由に扱える場もあり、展示は全て彼らの許可と相談の上で



先住民ギャラリー「ブンジラカ」の体験講座

決められる。オーストラリアギャラリーでは現代の眼差しを展示し、1930年のメルボルン杯競馬で優勝した競走馬の剥製展示がハイライトとなっている。この馬はスポーツ好きなオーストラリア人にとって国民的英雄なのだ。また、人気連続ドラマの舞台が再現され、これと同時に多民族からなる国民の日常生活を表している。

一般ギャラリー以外にディスカバリーセンターもある。コンセプトは博物館の展示を見ることで学習するだけではなく、子供が博物館のマルチメディアデータベースと実物のコレクションを積極的に使用することである。例えば自分の庭で見つけた虫の殻を持ち込み、実物と比較して自ら見つけることができる。マルチメディアの部分は既にネット検索ができるので日本からでも調べることができる。また館内にはIMAXの世界一大きい3Dスクリーンもある。主に教育向けの映画を放映しているが、IMAX用の一般映画も、来館者を得るためかどうかかわからないが、放映していた。

最後にシドニーの博物館にも触れておこう。2005年に中村政則先生と共に筆者は1827年創立の国で最古の「オーストラリアン博物館」を訪問したが、余り印象的なものではなかった。古いままの展示で、民族学より自然科学が重視されているため、魅力は余り感じられない。しかし1988年に開館した、国で最も大きいパワーハウス博物館(応用学芸科学博物館)は大変人気があり、体験型展示も多様な年齢層の来館者から評価されている。

ここ数年、この国の博物館の展示方法は改善されていると思うが、まだまだ改良点がある。「オーストラリアには文化はない」という厳しい評価を聞くが、実際はそうではなく、先住民や諸外国からの移民の混在した多文化社会であり、独特な雰囲気が出てきていると思う。オーストラリアの博物館が取り組んでいる課題は、様々な文化を尊重しながら、オーストラリア像を表すことである。しかし、集客も同時に重要な課題とであろう。

参考ホームページ

オーストラリアの博物館・美術館 <http://amol.org.au>